

まえがき

「熊野には、山の漂泊民がよく似合う」

その著『富嶽百景』で「富士には、月見草がよく似合ふ」と語った太宰治ふうによれば、そうだろうか。

紀伊^{きの}国は「木の国」でもあった。太古の火山活動が造った山塊が海岸まで迫り、稲作に適した平地は少ない。紀伊半島の真ん中に位置する「果無^{はてなし}山脈」の名の通り、深い山々と森林がそこを奈良や京都の都から隔ててきた。

熊野という地名は「クマ」と「ノ」からなる。その由来には諸説あるが、「奥まったところ」「へんぴなところ」を意味する「隈^{くま}」に傾斜地を表す「野」が付いた地名という解釈が、私の実感である。

山中の漂泊民には木地屋（木地師）、農具の箕を作ったり川魚を里人に売ったりするサンカ、タタラを踏んで製鉄をする踏鞴師などが挙げられるが、紀伊・熊野の山中に多かったのは「木の国」にふさわしい木地屋たち。すなわちトチ、ブナ、ケヤキ、ミズメといった木を削り抜いて椀や盆、杓子などを作った職人だ。一か所に定住せず、良木を求めて家族や小グループで移動した。

彼らが盛んに動き回ったのは近世だから、もはや山中に分け入ってもその姿を見ることができない。いまあるのは、古老や祖父母が耳にした話や、墓石や位牌などそのかすかな痕跡だけである。

だが、記録に乏しく痕跡も少ないとなると、かえって知りたい、息遣いを感じたいと思うのが人情だ。それは去った者たちへの郷愁かもしれない。

熊野に暮らして十年目。これまで私はその古代の様相や黒潮が運んだロマンを探求してきたが、ぐっと時計の針を進めて、各地に木地屋の面影を追った。

第一話 小椋谷再訪 木地屋の心のふるさと

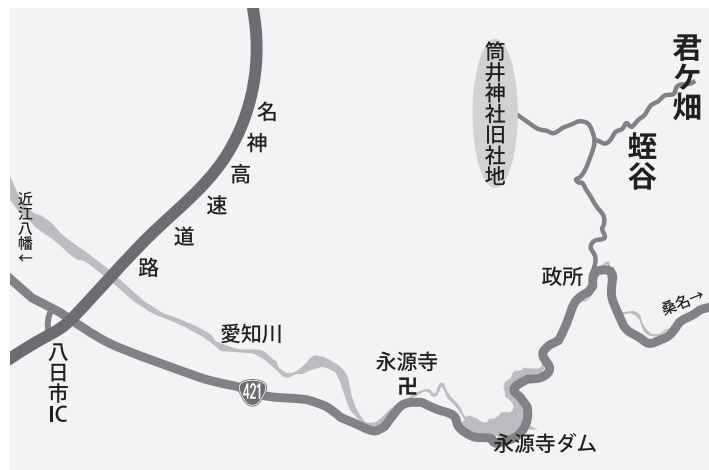
一 故郷でろくろを回す日々

木地屋（木地挽、木地師、轆轤師などという）は、山中に暮らし木を削り抜いて椀や盆、杓子などを作る職人をさす。江戸時代が最盛期で、明治、大正まで紀伊の森でも活躍した。彼らの心のふるさととは「小椋谷」、現在の滋賀県東近江市の蛭谷と君ヶ畑である。その理由はおいおい述べるとして、このエッセーを、私が二〇一九年七月二十九日に小椋谷を再訪したところから始めたい。

二度目の小椋谷訪問は二〇一二年九月十六日だった。この時は蛭谷の出身で、後に東近江市長になる小椋正清氏に現地でも偶然お目にかかった。

そんなところでコツコツ、盆や菓子器を作ってきた小椋昭二氏は二〇〇六年当時は五十歳、黒髪がふさふさしていた。十三年前と比べて髪に白さが目立つが、年齢の経過はお互い様だ。

「ここで生まれ、兄の製材所を手伝っていたが、二十五年前にこの仕事を始めました。愛知県の足助町に住む職人から数日、手習いしたけれどほとんど自己流。ここのケヤキや



名神高速道路を八日市インターでおり、国道四二一号を東に走る。紅葉で有名な永源寺を過ぎ、政所まんどころという場所から鈴鹿山系の山道に入る。愛知川えちの支流、御池川おいけに沿った蛭谷、さらにその奥の君ヶ畑あたりを小椋谷と呼ぶ。小椋昭二氏（昭和二十六年生まれ）の「ろくろ工房 君きみ空」は標高四百四十メートルの君ヶ畑にある。小椋氏に会うのはこれで三回目。最初は二〇〇六年四月八日で、悲劇の主人公たちにスポーツをあてた新聞連載に惟喬親王これたかを取り上げ、彼が隠棲いんせいしたと伝えられる小椋谷を取材したときだった。

惟喬親王は、第五十五代文徳天皇の第一皇子として承和十一年（八四四年）に生まれた。母は豪族、紀氏の出身だった。天皇は惟喬をかわ



君ヶ畑の作業場で電動轆轤を回す小椋昭二氏

トチが少なくなったので岐阜県からトラックで買い付けていましたが、五年前に心筋梗塞で一時入院して以来、買い付けに行っていません。もともと原木は手持ちがたくさんあり、その必要ありませんが……」
独り暮らし。体を気遣ってのんびりやる、
と言いつつ、前にかがった頃と比べてランチョンマット、宝石箱、うちわなど製品の種類は増えた。東近江市の「ふるさと納税返礼品」にも頼まれるそう。だって、
でも一点万単位のお値段。たくさん売れるわけではない。「収入はしているけれども年金もあるし、なんとかやっていけばいいですよ」と昭二氏はいたって欲がない。

別棟の作業場には丸く木取りをした材料がうず高く積み上げられている。その形で最低五年干した後、だいたいの型を取る荒削りをして更に一年乾燥させてから電動の轆轤に固定し、先に刃のついた鉄棒（カンナ）で削る。

実際の作業を見せてもらった。轆轤に取り付けた木を正面から削る「正面挽」と横からの「横挽」という二種類のやり方があり、地域によって異なるというが、彼は「正面挽」でやってきた。

ここで生まれ、木地屋特有の姓を持つのに「伝統を受け継ぐ」といった気負いのないところがいい。「そんなことを言ったら、ちゃんとした人について、伝統のやり方を守らなければならなくなる。堅苦しいのはいやです」

今、十六軒に二十人ほどが暮らす君ヶ畑集落には惟喬親王がそこに住んだという金龍寺（高松御所）、親王を祀る大皇器地祖神社（旧大皇大明神）、そして親王の御陵がある。

小椋昭二氏と別れた私は、道を引き返し蛭谷地区の木地師資料館を訪ねた。文化の維持保全のため旧永源寺町が一九八一年に建てた施設で、蛭谷の筒井神社の境内にある。

最初の訪問時に応対してくれた小椋正美氏（昭和六年生まれ）は資料館の生みの親で、長年その管理にあたってきたが、五年ほど前に亡くなった。現在は神社のすぐ下に実家があり、滋賀県豊郷町（とよさと）からときどき里帰りするという小椋重則氏（昭和二十一年生まれ）が自治会長の傍ら管理を引き受けている。

「私の先祖は筒井神社の関係者だったと聞いています。市長の小椋正清さんとは親戚です。各地の木地屋を取り仕切った筒井八幡宮（筒井神社）はもともとここからさらに上った筒井峠にありました。『筒井千軒』といわれたから、往時は結構にぎわったのでしょう。いま蛭谷は、こちらに移住して昭二さんと同じ仕事をしている北野清治さんを除けば、常時住んでいる人はいません」。重則氏は少し寂しそうにこう語った。

筒井峠の旧社地にも惟喬親王の御陵と称する石塔があった。小椋谷だけで二つの墓所。ほかにも「親王のお墓」は各地に数多くあるそう。信奉者たちは自分たちの地に「お墓」を持ってこないと気が済まないらしい。

二階建ての資料館の展示品はなかなかのものだ。

まず氏子駄帳。君ヶ畑（高松御所と大皇大明神）や蛭谷（筒井八幡宮と帰雲庵）は近世、
 競争って氏子狩（氏子駄）を各地に派遣した。氏子料や初穂料のほか、烏帽子着（成人式）、
 直衣途（仲間入り）、官途成（改名すること）の費用など、なんのcanのと名目を付けて木
 地屋から金銭を集めた。その集金台帳である。

蛭谷の氏子駄帳は正保四年（一六四七年）から明治二十六年（一八九三年）の分が三十
 四冊、君ヶ畑の氏子駄帳は元禄七年（一六九四年）から明治六年（一八七三年）までの分が
 五十三冊残っており、その一部が展示されている。氏子狩（氏子駄）帳は『永源寺町史』
 （木地師編上下巻、二〇〇一年）として刊行された。合戦、災害、火災などで古文書が失わ
 れる中、貴重な史料といえよう。

木地師資料館ではほかに、木地屋の由緒を示し、どこでも通行してよいというお墨付き
 を与える天皇の綸旨、時の有力者の免許状、往来手形などの展示品も興味深い。ことの真
 偽はともかく、筒井八幡宮（筒井公文所）や高松御所への寄進の見返りに木地屋たちがも
 らったこれらの文書は彼らの「パスポート」であり「戸籍謄本」でもあった。その多くは、
 この手の文書によくあるような偽書かもしれない。だがそうであっても、喜んで受け取る
 人たちがおり、それらが実際に通用したのなら意味はあったというべきであろう。

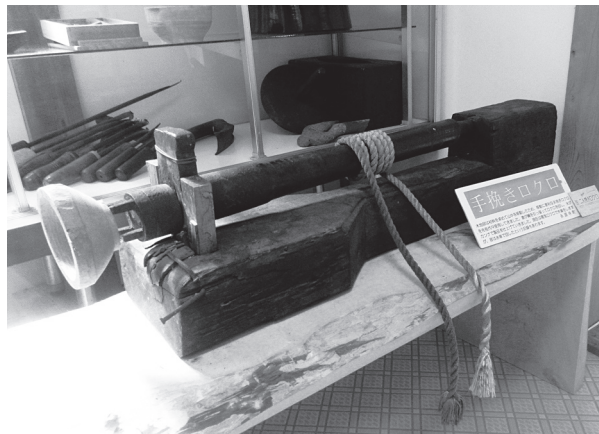
二 利害が合ったシステム

歴史にはファクト（事実）とフィクション（創作）が入り組んでいる。人びとの祈り、思惑、権謀術数^{けんぼうじゆつすう}などがそこに詰まっているからだ。時の波に洗われるうちに、フィクションがファクトとして定着することもある。木地屋の歴史も例外ではない。

この国に轆轤をもたらししたのは、木地屋が祖と仰ぐ惟喬親王ではなく、秦氏^{はた}ら渡来人であろう。奈良時代の正倉院文書や律令制度の施行細則である平安中期の延喜式^{えんぎしき}に「轆轤工」という職制が載っている。

轆轤を使った製品として有名なのは百万塔だ。奈良時代後期、称徳女帝の発願^{ほつがん}によって作られた百万基の小さな木製三重塔である。平城京周辺の十大寺に配られたが、残っているのは法隆寺の数万基だけ。百万塔は渡来人の指導の下に大量生産されたと思われる。

轆轤工は当時の先端技術者だった。百万塔を作ったのは朝廷お抱えの集団だったようだが、ほかに有力社寺や貴族に仕えていた職人もいた。彼らは律令制度の崩壊によって職を



木地師資料館に展示されている「手挽きロクロ」

資料館の展示品で私が一番注目したのは「手挽きロクロ」である。木地を端に据え付けた木軸に縄が巻きつけられ、一人が縄を引いて軸を回し、もう一人がカンナで木地を削って製品に仕上げる。惟喬親王が法華経の軸が回ることから轆轤を思いつき、里人に伝授したという伝承を想起する素朴な製品だ。

この手挽きロクロは地元のものではなく、秋田県雄勝郡^{おぐち}で使われていたとの説明がある。「展示の文書は蛭谷のものですが、工作の道具類は全国からの奉納品です。蛭谷に木地職人はほとんどいなかったからではないでしょうか」という小椋重則館長の言葉が耳に残った。

失い、各地に分散していった。

寺院建築や百万塔などには多くの木材が必要だった。このため森林資源の豊かなところに「山作所」が設けられた。そこには伐採、加工、木工などの職人も詰めていただろう。近江国にもいくつか「山作所」が設けられた。社寺の造営が衰えれば彼らの仕事も少なくなる。

各地を丹念に回った民俗学者宮本常一は、その間の事情をこう記している。

「百万塔の製作に」携わったろくろ工はおよそ四〇〇人であつただろうと推定されている。このような工人たちの拠点となっていたものは奈良を中心とした付近の山地で、東大寺建立にあたっては田上山作所、甲賀山作所、伊賀山作所、田上大石山、高島山、立石山などで木材がとられ、その木材がそのまま川や湖を利用して奈良に送られるものと、小さな細工物は現地で加工して送られるものがあつた。したがって山作所（杣）のあるところには木工の工人たちが多くいたはずであり、その中にはろくろを用いる者も含まれていただろう。

さて律令国家が権威を持ち、社寺造営などの事業が相ついでおこなわれている間は、そうした工人たちが生活をたてることの仕事があつたであろうが、十一世紀以降、律令制度がおとろえるにつれて政府の力を中心にする社寺造営が下火になって来ると、それに伴う工人たちの仕事も減り、新しい働き場を見つけざるを得なくなる。それが、民衆の必要とする膳・盆・鉢・椀・皿のようなものの作成ではなかったかと考える。

〔木地屋の漂泊〕、『山と日本人』八坂書房、二〇一三年所収

〔「」は筆者による補足・注記。以下同じ〕

宮本の推測するような経過を経て、小椋谷周辺にも轆轤工や木工職人が集まって来たのではなかろうか。

では惟喬親王伝承はそれにどうかかわるのだろうか。

この貴種流離譚がいつごろ伝えられたものかわからないが、江戸時代に蛭谷の筒井八幡宮の神主を務めた大岩家が親王伝承や氏子駈（氏子狩）制度の宣伝、普及に大きな役割を果たしたことは間違いない。中でも十七世紀後半の人物で三十三代の大岩助左衛門重綱は智者者だった。各地の木地屋たちは筒井八幡宮の氏子であるとして、彼らを束ねる「統制システム」を構築したのである。

大岩家はその家系図によれば惟喬親王の家臣、藤原実秀が小椋姓を賜って蛭谷に住み着き、途中で大岩姓に変わった。助左衛門重綱は『名寄』『大岩助左衛門日記』『愛智太山草』の三部作によって自説を固めた（丁野永正著『永源寺おぐら谷 木地師慕情』サンライズ出版、二〇一八年）。

筒井八幡宮では氏子たちが一年交代で神主を務めてきたが、たびたびの帰郷は難しくなっている。常神主制に変わった。木地屋の歴史に詳しい橋本鉄男氏は「氏子狩の体系は、彼らの社会に固有する宗教感覚や特異な連帯観念を、当時の経済的な情勢の変化にたくみに調和させた、蛭谷側の天才大岩氏の企図によって確立されていたものらしいのである」と述べている（『木地屋の移住史』第一冊、民俗文化研究会、一九七〇年）。

とはいえ、惟喬伝承も氏子狩制度もそれを喧伝する小椋谷側の利害や意向だけでは長続きしなかっただろう。皇族を祖に持つという誇り、各種のお墨付き文書や通行手形などの効力、同じルーツを有するとの連帯意識があったからこそ、全国に散った木地屋たちもその言い伝えを信じ、システムを受け入れて奉納金を差し出したのである。つまり一連の小椋谷伝承は「朝廷や社寺お抱えの木工職人が各地に散った」というファクトに「轆轤の技

をお教えになった惟喬親王は小椋谷で亡くなった」などのフィクションを巧みに組み合わせた「共同幻想」だったといえまいか。

いや過去形で語るのは適当ではないかもしれない。現在も全国から小椋、小倉、大蔵姓の人たちがルーツを訪ねてやってくるし、木工、金属加工、塗物などの関係者も参拝に来る。そのロマンは生きているのである。

君ヶ畑の大皇大明神（現・大皇器地祖神社）と曹洞宗の金龍寺、蛭谷の筒井八幡宮（現・筒井神社）と臨済宗の帰雲庵が、それぞれタッグを組んで盛んに各地に出向いた江戸中期以降、小椋谷は「木地屋の里」というより「木地屋の元締めの本拠地」となった。木地師資料館の小椋重則館長が「ここに木地師が使った道具類はなく、すべて全国からの奉納品です」と語ったのは、そんな背景がありそうだ。

小椋館長と小椋正清東近江市市長の実家は筒井神社境内のすぐ下にある。近世はともに「元締め側」の家系だろう。

事情は「生まれ育ち君ヶ畑」という小椋昭二氏も同じ。彼の父方は大蔵姓、母方は小椋



蛭谷の筒井神社(上)と帰雲庵(下)



君ヶ畑の大皇器地祖神社(上)と金龍寺(下)

姓。母は女ばかり六人の長女で、逆に男ばかりという父親が、製材所をしていた小椋家に養子に來た。

「我が家は明治二十六年（一八九三年）に最後の氏子狩に奥州方面に出かけた小椋亀次郎の親戚筋です。彼は林業家でした」と昭二氏は語る。つまり昭二氏の祖先も近世は木地屋を束ねる側に所属していたようだ。私はそれを知る前「木地屋の血が流れていることを感じますか」なんて、やや的外れの質問をしてしまった。

橋本鉄男氏は、明治七年（一八七四年）に君ヶ畑で生まれた小椋亀次郎翁が亡くなる直前（当時八十五歳）に貴重なインタビューをした。その抜粋をこれも『木地屋の移住史』から紹介したい。

明治二十六年といえば、ちょうどわたしが二十才を迎えた春の事でしたな。十才年長の野瀬兵七ツアンと二人で行きました。四月五日に立ちました。最初は福島県の湯小屋というところへ行きました。そこは五、六十戸の村でした。あの辺りには何々小屋というところが多く、温泉がまたいたるところに湧いていました。

白河まで汽車に乗って行き、そこから廻りはじめたのです。つぎからつぎと山越し

に行きました。本道を行くと三里も四里もある遠い所でも、間道を行くと近いものでした。四月というのに山々にはまだ雪が残っていました。木地屋の村は随分とありまして、三十位も訪ねました。だいたいわたくしたちの順廻は近いところは奥州へ行きましたものです。先に行ったところへ行かなければ、自然なじみがうすかったからです。湯小屋へ行きましたら、ちょうど木地挽きをしている家が十五軒ほどありました。お椀やお盆を挽いている他は、木地屋とはいいませんでしたな。あれが轆轤（りく）というんですか、随分ざつとしたものでやっております。こちらに木地屋が無かったので珍しかったものです。もう一月も行ったら嫌になりました。苦しかったことというては、もうどんなことがあっても木地屋なんぞにはなりたいたいと思いませんでした。

帰って來たら、大きな虱（しらみ）が襦袢（じゆばん）についていて、母親がびっくりして、「奥州の虱は色が違う」といつて笑っております。

方々を廻ってから戻って勘定を済ませたら、残りはいくらもなかったもんです。だいたい志（し）だけ集めたんですが、その当時で一円くらいが多かったもんです。それも台帳には一円と書かなければ他に見栄が悪いといつて、実際にはそれだけくれないものがあつたわけです。

高松御所御用の御札を持って行きました。それを持たないと信用をしてくれなかったものです。昔は大きい金の十六菊の付いた両掛りようがけ「旅行用の行李こうりの一種」を持って行ったのですが、わたしらの時には、菊の紋がむずかしかったので持つて行っておりません。

普通の宿にはとまれませんので、普通の宿にとまりたくてうずうずしました。木地屋は山住みで、生活程度が話にならないくらいに低かったものですが、こちらでは食べられなかった鮭の切り身をよばれて、それだけはそれはそれはうまかったことを忘れることはできませんでした。